



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 (2016.10) 平成27年度:91-92.

同種造血幹細胞移植を受けた青年期の患者の心理変化

高橋 つぐみ, 打越 友佳, 小野寺 優, 太田 千尋

同種造血幹細胞移植を受けた青年期の患者の心理変化

旭川医科大学病院 5 階西ナーステーション
○高橋つぐみ、打越友佳、小野寺優、太田千尋

【目的】長い治療経過を経て同種造血幹細胞移植を受けた青年期にあるA氏に移植後どのような心理的变化が生じたのかを明らかにする。

【方法】研究デザイン：質的研究 データ収集期間：平成26年7月～9月 研究対象：造血幹細胞移植を受けた青年期の患者 データ収集方法：半構成的面接

【倫理的配慮】対象者に研究の趣旨、プライバシーの保護、不参加および中断による不利益をうけないことなどを書面および口頭で説明し同意を得た。本研究は、研究者の所属する倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】再発告知から移植までは『漠然とした移植に対する不安』があった。移植から無菌室退室までは、『無菌室での身体的苦痛』『非日常生活に対するストレス』『今後に対する不安』を抱え、『患者のニーズに沿った看護師の対応』を求めている。無菌室退室から退院までは『自分が予想していた見通しと現実とのずれ』が生じた。その後CMV腸炎に罹患し『CMV感染症罹患時の状態』では疼痛による精神的負担を抱え無気力な状態となったが、その時期の

『周囲の支え』が重要であった。『移植を乗り越えられた要因』は、前向きな性格や明確な目標を持っていたためであり、それらが回復への原動力となった。退院後は『移植を振り返っての満足感と現在の目標』を持っている。

【結論】

1. 移植から無菌室退室までは『漠然とした移植に対する不安』を感じ、無菌室入室中には『非日常生活に対するストレス』と『今後に対する不安』を抱えていた。無菌室退室から退院までの間に『自分が予想していた見通しと現実とのずれ』が生じたが、『周囲の支え』もあり、移植を乗り越えた。退院後は『移植を振り返っての満足感と現在の目標』を得ている。
2. 無菌室入室中は身体的苦痛と治療への不安や隔離でのストレスを抱えているため、『患者のニーズに沿った看護師の対応』が必要である。
3. 無菌室退出後、入院が長期化する場合には社会から切り離されているため、日常性を取り戻せるような人的環境を整える支援が必要である。

1. 研究の背景・動機

◆同種造血幹細胞移植を受け、退院に向けてリハビリテーションが開始された時期に、一時的にうつ病を発症したA氏の経過を通して、移植を受ける患者は、無菌室入室中だけでなく治療過程で様々な気持ちを抱いているのではないかと考えた

◆A氏の治療過程における心理変化を明らかにすることで、造血幹細胞移植後の患者の心理的な支援の一助となるのではないかと考えた

2. 研究の目的と意義

研究目的: 長い治療経過を経て同種造血幹細胞移植を受けた青年期にあるA氏に移植後どのような心理的变化が生じたのかを明らかにする

意義: 造血幹細胞移植後の患者への看護実践の一助にする

3. 研究方法

研究方法: 事例研究 質的記述的研究

研究対象: 造血幹細胞移植を受けた青年期の患者

データ収集期間: 平成26年7月～9月

データ収集方法: 半構成的面接、面接内容は対象者に許可を得てICレコーダーに録音した

分析方法: 面接内容は逐語録として再現し、コード化し類似性を持つものでカテゴリー化し分析を行った。分析の過程では、研究的な視点を持つ看護師にスーパーバイズを受けた

4. 結果

インタビューの結果119のコード、23のサブカテゴリー、10のカテゴリーが抽出された。

◆移植から無菌室退室まで

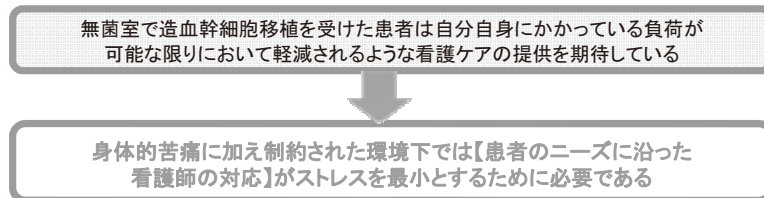
カテゴリー	サブカテゴリー
移植に対する漠然とした不安	＜移植に対する不安、気がかり＞
無菌室での身体的苦痛	＜前処置と全身照射による悪心＞
非日常生活に対するストレス	＜普通の生活を送れない苦痛＞や＜隔離されている状況へのストレス＞
今後に対する不安	＜この先の治療に対する不安＞、＜移植後の不安＞
患者のニーズに沿った看護師の対応	＜全介助となった際の看護師へのニーズ＞や＜患者のニーズを汲み取った看護師の対応＞

◆無菌室退室から退院まで

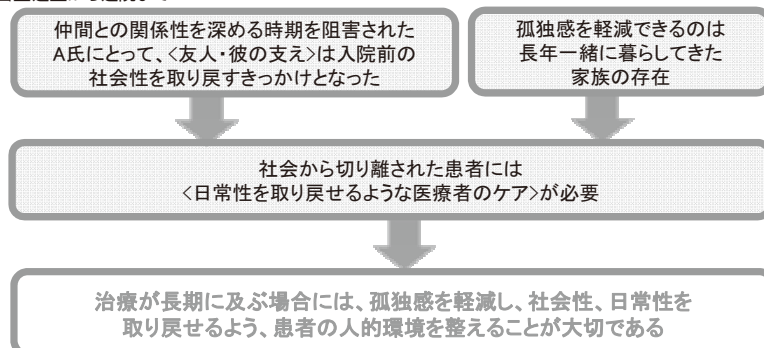
カテゴリー	サブカテゴリー
自分が予想していた見通しと現実のずれ	＜生着したときの安心＞、＜自分が予想した今後の見通し＞、＜予想外の体力の低下に対する衝撃＞
CMV感染症罹患時の状態	＜疼痛による精神的負担＞、＜CMV感染症による無気力＞、＜不明瞭な記憶＞
周囲の支え	＜日常性を取り戻せるような医療者のケア＞、＜友人・彼の支え＞、＜家族の支え＞
移植を乗り越えられた要因	＜前向きな性格＞、＜回復への原動力＞
移植を振り返っての満足感と現在の目標	＜体力低下による不安＞、＜移植を乗り越えての満足感＞、＜治療経験から培った強み＞

5. 考察

◆移植から無菌室退室まで



◆無菌室退室から退院まで



6. 結論

- (1) A氏は、無菌室退室まで【漠然とした移植に対する不安】を感じ、無菌室入室中は【非日常生活に対するストレス】や【今後に対する不安】を抱え、無菌室退室後も【自分が予想していた見通しと現実とのずれ】を感じたが、移植を乗り越え、現在では満足感を感じていることが明らかとなった
- (2) 造血幹細胞移植を受けた患者は、【患者のニーズに沿った看護師の対応】が必要である
- (3) 造血幹細胞移植を受けた患者は、日常性を取り戻せるような人的環境を整える支援が必要である